研究初め提案

令和４年４月５日

令和４年度　研究全体計画

研究部

【研究主題】 **価値の創出と受容，転移をコアにした教科融合カリキュラムの開発**

～「創る科」の創設を通して～

【幼小中一貫教育研究主題】**「対象・他者・自己と向き合う子供の姿」を視点とした保育・授業づくり**

◆ 令和４年度研究部テーマ「主体性」

「主体性」を大切にした研究こそ長続きし，深まりのあるものになる。そして，おもしろい。仕方なくやる，誰かにやらされるという思いが少しでもあれば研究は浅くなる。日々の授業づくりで困れば必然的に誰かに助言を求めるし，自分の時間を削って書籍をあさったり，納得のいくまで考えたりする。その時間の使い方は，主体的に研究に邁進する一つの様相である。一人一人が「主体性」を発揮し，附属山口小学校の研究と個人の研究が一層深まることを研究部のテーマとする。しかし，研究の柱である授業等を提案するということは，責任も伴う。何でも自由に提案すればよいということではない。一人一人が学習指導案，授業，研究発表に責任をもち，主体的に研究に取り組むことが大切である。主体的に学ぶ教師のもとでは主体的に学びを進める子供が育つと信じ，大人も子供も学ぶことを楽しむ学校を目指したい。

目次

◇　研究部員の役割分担
１　今年度の研究の取り組みについて
２　研究の進め方，方法と内容
３　研究組織について
４　価値の創出と受容・転移をコアにした教科融合カリキュムに関する研究発表会について
５　幼小中一貫教育実践研究発表会について
６　共同研究と研究の連携
７　フリートークについて
８　着任者に関わること
９　各種学習指導案について
１０各種提出期限，提出先，提出方法について
１１教室掲示について
１２その他
◇　おわりにー研究に向かう我々の構えー

◇研究部員の役割分担と研究組織

１　研究部員　　岡本　貴裕・今津　圭佑（一貫 CO）・津守　成思・中川　　穂・田島　大輔

２　役割分担

■　**仕事の確認と責任**……【岡本】

■　**各担当**

（１）校内研修・研究全体に関わる企画・運営……【岡本】
（２）幼小中一貫教育（実践発表会）の推進，企画・運営……【今津・岡本】
（３）幼・中との連絡・合同会議研究班企画……【今津・岡本】
（４）教科融合カリキュラム（発表会）の推進，企画・運営……【津守・中川・岡本】
（５）教科融合カリキュラムの開発……【津守・今津】
（６）研究企画本，創る科報告書の企画・編集……【岡本・津守】
（７）研究計画・部会の企画・運営……【岡本】
（８）研究発信の企画，編集……【岡本・津守】
（９）渉外，文書作成・発送……【田島・中川＋事務部】
(10) カリキュラムアドバイザー・指導助言者・講師関係……【田島・中川・津守】
(11) フリートーク研究……【中川】
(12) 他校研究案内等紹介……【田島】
(13) 会計（研究・書籍・創る科：事務部に確認）……【田島】
(14) 研究図書の管理・販売……【田島】
(15) 市教研事務……【田島】
(16) 研究授業時の役割分担，連絡調整……【岡本】
(17) 研究会議の記録の整理・保管……【田島】

１　今年度の研究の取り組みについて

（１）研究概要について

本研究の背景には，国の課題であるカリキュラム・オーバーロードがある。カリキュラム・オーバーロードとは，カリキュラムの過積載，つまり，カリキュラムの内容が過多になっている状態のことである。カリキュラム・オーバーロードは，学校や教師，子供に過大な負担がかかっている状態として捉えられており，このことによって学びが子供にとって「浅く広い」学びとなり，本質的な理解に至らないままに学習を終えてしまう可能性さえあるとされている。そこで，Less is more（少なく教えて豊かに学ぶこと）を原理とし，各教科等の時数を削減しながらも学びの質を向上させることで豊かな学びを実現することが求められている。そこで，本研究では，各教科等の学習では本質（見方・考え方），新教科「創る科」の学習では価値の創出と受容，転移を促すことによる両者の有機的なつながり，つまり，融合が意図的に行われることによって，Less is more（少なく教えて豊かに学ぶこと）を実現しようとしている。各教科等の内容や時数削減をしたとしても，各教科等の本質（見方・考え方）を重視することや，「創る科」を創設し価値を学習内容として直接扱うことによって，豊かに学ぶ子供の姿につながることを，教科融合カリキュラムの開発や創出と受容，転移の学習過程，子供の姿を軸にした教育効果の測定等の角度から検証していく。なお，幼小中一貫教育の視点として「自己と向き合う姿」を授業改善の視点として授業改善を図る。やまぐち学園の「よりよい未来を共に創り出す人間」像の自己の姿として掲げられている「自己を見つめる姿」や「自己の学びを見つめる姿」は，本校の研究における受容，転移の過程で見られる姿と重なる。そのため，小学校としては「自己と向き合う姿」を「各教科等の本質（見方・考え方）や価値について自覚化し，他の学習に活用していく子供の姿」として捉える。以下に小学校段階が該当する各学年区分における自己と向き合う姿を示す。

	第Ⅱ期（５歳後半～小２）	第Ⅲ期（小３・小４）	第Ⅳ期（小５～中１）
「自己」と向き合う姿	本質（見方・考え方）や価値に気付き，他の学習で試したり活かしたりしている。	本質（見方・考え方）や価値のよさに気付き，他の学習に活用している。	本質（見方・考え方）や価値を自覚し，他の学習に活用している。

（２）研究主題について

本研究の実施に当たって，子供に価値や各教科等の本質（見方・考え方）を学習場面や生活場面において自在に使いこなすことができる資質・能力（汎用的スキル）を養いたいと考えている。本研究の概要図を以下（図１）に示す。

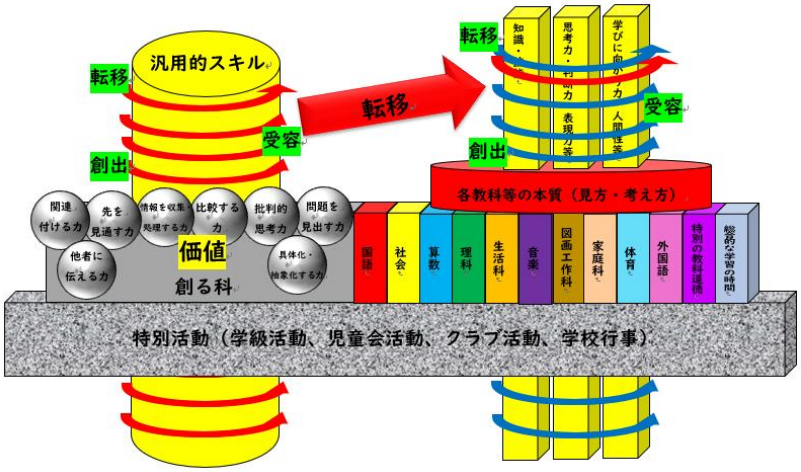

図１　令和４年度　研究概要図

各教科等の学習では，各教科等の本質（見方・考え方）を創出と受容，転移を促すことによって，３つの資質能力（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」）を育む。新たな教科として創設した「創る科」の学習では，価値を創出と受容，転移を促すことによって，「汎用的スキル」を育む。「汎用的スキル」を育むことは，各教科等の学びを促進させると考える。なお，「汎用的スキル」の定義は以下のとおりである。

「汎用的スキル」…価値を各教科等の学習の中で使いこなし，日常生活の中に生かしていく能力

各教科等の学習で創出と受容，転移を促す各教科等の本質（見方・考え方）については，「各教科等の見方・考え方（働かせている際の子供の言葉と姿）一覧」を参照する。また，「創る科」の学習で学習内容として直接扱う価値については，表１のとおりである。１～４年生では７つ，５・６年生では６つと発達段階によって分けているが，全学年で８の価値を意識した学習指導を行う。

表１　「創る科」で扱う価値

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
具体化・抽象化する力	○	○	○	○	―	―
比較する力	○	○	○	○	―	―
批判的思考力	―	―	―	―	○	○
問題を見出す力	○	○	○	○	○	○
情報を収集・処理する力	○	○	○	○	○	○
関連付ける力	○	○	○	○	○	○
他者に伝える力	○	○	○	○	○	○
先を見通す力	○	○	○	○	○	○

創出と受容，転移の各過程の定義は以下のとおりである。

「創出」「受容」「転移」の各過程の定義

「創出」…無自覚ではあるが，価値を生み出したり，示された価値について考えたりする過程
「受容」…無自覚であった価値を自覚的に捉えていく過程
「転移」…①受容した価値を他の文脈や場面においても活用できるのかを考えたり実践したりする過程
②「創る科」の学習で創出と受容，転移した価値を各教科等の学習に活用できるのかを考えたり実践したりする過程

以上のように，本研究では，「創る科」の学習で扱う価値が各教科等の学習に質的に融合することをねらっている。質的な融合を教育課程の編成原理とし，教科融合カリキュラムの開発と編成に取り組む。本校では，教科融合カリキュラムを「各教科等の学習を見方・考え方で整理し，「創る科」の学習で育む価値を教科等横断的な視点として編成したカリキュラム」と定義づけた。各教科等の学習を見方・考え方で整理し，「創る科」の学習で育む価値で各教科等をつないでいくという，縦軸と横軸のイメージで編成している。カリキュラム編成イメージ図（図２）を示す。

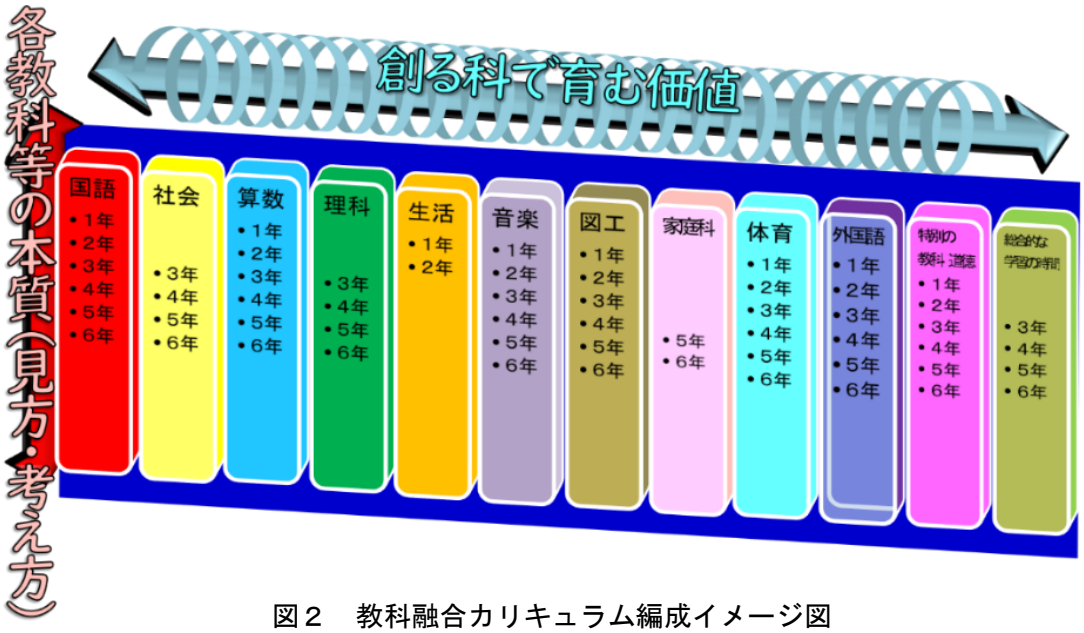

図２　教科融合カリキュラム編成イメージ図

２　研究の進め方，方法と内容

（１）１年間の研究

■年間をとおして

【研究開発について】

□教科融合カリキュラムの運用

□各教科等の単元配列表の見直し

□創出と受容，転移を行うための学習展開や支援の方法の開発

□「創る科」の教材開発

□「創る科」における評価の在り方

□「創る科」研究の教育効果の測定

□「創る科」の指導要領の素案の見直し

□指導者を招聘しての授業研究

□研究企画本の企画・準備，作成

【幼小中一貫教育について】

□各学年区分の「３つの姿」を視点とした授業実践～「自己と向き合う姿」に重点を置いて～

□各教科等の一貫カリキュラムの見直し

【その他】

□フリートーク研究

□フリー参観授業

□大学との連携

□カリキュラムアドバイザーとの共同研究

□他の研究校への研究視察

■前期

＜前期・前半＞（４月～７月）

□要請訪問（奈須先生来校）

□着任した教諭による授業公開
□提案授業指導案検討
□提案授業，授業検討
□「創る科」運営指導委員会の実施（奈須先生，福本先生より受指導）
＜夏季休業期間＞（７月末～８月）
□教科融合カリキュラムに関する研究発表会の企画・準備
□教科融合カリキュラムに関する研究発表会の指導案作成
□幼小中一貫教育実践研究発表会の企画・準備
□幼小中一貫教育実践研究発表会の指導案作成開始
□研究企画本原稿作成，検討
＜前期・後半＞（８月末～９月中旬）
□教科融合カリキュラムに関する研究発表会の指導案作成
□幼小中一貫教育実践研究発表会の指導案作成
■後期
＜後期・前半＞（９月中旬～１２月）
□教科融合カリキュラムに関する研究発表会の指導案検討
□幼小中一貫教育実践研究発表会の指導案検討
□教科融合カリキュラムに関する研究発表会の開催･･･１０月２２日（土）
□運営指導委員会の実施
□幼小中一貫教育実践研究発表会の開催･･･１１月２５日（金）
＜後期・後半＞（１月～３月末）
□研究フォーラムでの研究発表
□研究の反省と展望（個人・全体）
□幼稚園・中学校との研究の共有
□研究開発最終年次報告書作成，提出
□研究企画本完成

（２）研究方法と内容について

主には，次のとおりである。

①個人研究テーマの設定
②提案授業
③指導案検討
④各プロジェクトチームを中心とした研究推進
⑤カリキュラムアドバイザーとの共同研究
⑥研究発表会

また，研究企画本と研究開発最終報告書にて研究の成果を取りまとめ，発信する。

①個人研究テーマの設定について

年間をとおして追究する個人研究テーマを設定する。各自が，研究主題，特に，今年度の研究の方向性を基に，従来の各教科等の学習指導の問題意識と１年間の取組の方向性（仮説）を立てる（別紙様式）。そうすることで，ぶつ切りの研究ではなく，年間をとおして研究を深めることができる。また，同じ方向性を向く者同士でチーム編成をすることで，研究を一層深みのあるものにしたい。

②提案授業について

前期に講師を招聘し，提案授業（全６本）を行う。５校時に授業を実施する。各教室では自習体制を整える。授業記録はとらない。授業者については，希望を取り，チームのバランスを考慮し，決定する。また，公開授業については，年間最大２本までとなるよう配慮する。

【授業検討の手順】

ア　授業者から

イ　司会者は，全体に検討の中核となる分節や検討の視点や窓口を示す。

ウ　指定討論者３人と授業者が協議をする。（１５分程度）＊その際，司会は進行役に徹し，司会の判断で終了する。

エ　司会者は，検討会を全員に開く。＊授業についての検討（３０分程度）

オ　司会者は，本時全体を見渡しての発言を求める。

カ　研究部長から

キ　教頭，校長から

ク　授業者から（授業及び授業検討をとおして感じたこと）（１分程度）

（１０分の休憩をとる。）

ケ　講師（研究発表会の指導者）より受指導（３０分）

【提案授業の記録について】

・ビデオと写真の記録は研究部が行う。
・当日の講師対応は，研究部が行う。
・指導案等の資料については授業日の１週間前までに研究部より送付する。
・提案授業者については，４月２１日に日付を決定し，提案授業日に講師として来ていただくようすぐに内諾を得る。研究発表会の講師（指導助言者）の提案授業日の来校が難しければ，カリキュラムアドバイザーに講師依頼をする。

③指導案検討について

１年間をとおして，同チームでの指導案検討を重ねる。子供の意識や個人研究テーマを重視して行う。チーム数は４チームとする。内訳は，４人×３チームと３人×１チームである。チーム編成の際に，以下の編成意図をもって仕組むこととする。

●同教科を同じとする。
●個人研究テーマを参考にする。
●チーム長は研究部が担当する。

なお，全体検討は設けない。ただし，研究部が適宜（週１回）進行状況の確認をする。

④各プロジェクトチームを中心とした研究推進について

昨年度に引き続き，授業チーム，評価チーム，カリキュラムチームの３つのプロジェクトチームを中心とした研究推進を行う。研究会議にて月に１回進捗状況の確認を行う時間を確保する。

⑤カリキュラムアドバイザーとの共同研究について

各教科等の本質（見方・考え方）について整理し，内容削減を試みたり，指導案作成に際して授業構想等の相談をしたりする。授業を公開したり，カリキュラム編成会議をとおして議論したりすることで，教科融合カリキュラムの編成等に取り組む。今年度のカリキュラム編成会議は，以下のとおりである。

第１回　７月２９日（金）９：００～
第２回　８月２５日（木）１５：１０～
第３回　９月１３日（火）１３：３０～

なお，１０月２２日（土）の研究発表会にて各教科等において分科会を設けることを計画しているため，可能であれば出席していただくようお願いする。また，日頃から助言を求める等連携を図っていきたい。

⑥研究発表会について

令和４年度は，「創出と受容，転移をコアにした教科融合カリキュラムに関する研究発表会」と「幼小中一貫教育実践研究発表会」の２つを開催する。日頃の研究を発信する機会としたい。創出と受容，転移をコアにした教科融合カリキュラムに関する研究発表会では，「転移」をキーワードに，各教科等と創る科の学習を公開する。幼小中一貫教育実践研究発表会では，「自己と向き合う姿」をキーワードに各教科等の学習を公開する。

３　研究組織について

本校の研究組織について図３に示す。外部の連携組織として，上智大学の奈須正裕先生や文部科学省国立教育政策研究所総括研究官の福本徹先生をはじめとする運営指導委員会や山口大学の教授等で組織された研究支援委員からの助言をいただく。教科融合カリキュラムの編成に際しては，県内外の大学，教育委員会，附属小学校，公立小学校等の教員をカリキュラムアドバイザーとしてお招きし，年３回のカリキュラム編成会議を実施する。校内の研究体制は引き続き，３つのプロジェクトチーム（授業チーム，評価チーム，カリキュラムチーム）とする。

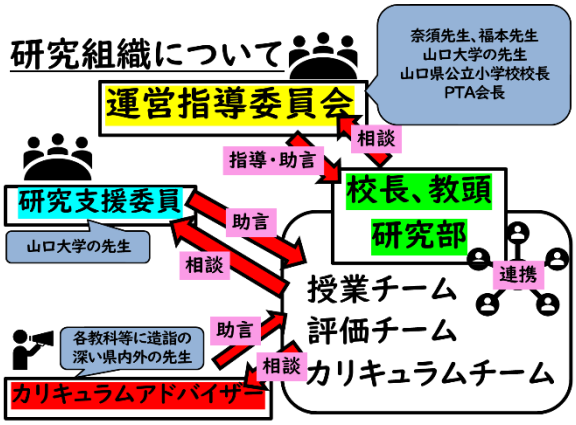

図３　研究組織図

チーム	カリキュラムチーム	授業チーム	評価チーム
内容	・教科融合カリキュラムの運用と評価・改善する。 ・学習内容を削減する。	・価値の転移が生まれる学習過程や支援の分析をする。	・「創る科」教育効果を測定する。 ・「創る科」の指導要領を見直す。（子供の姿）
メンバー	志賀　久保田 今津　○津守	後藤　原田　林 岡本　○中川	重枝　五十部　石田 池永　田中　○田島

今年度は，参集型の研究発表会の開催を考えているため，以下の研究発表会運営班を組織する。

研究発表会運営班

環境整備班	掲示班	視聴覚班
会場や清掃について計画	校内案内掲示について計画	視聴覚機器の準備や人員配置等について計画
○津守　重枝　石田　池永 原田　林　田中	○今津　志賀　後藤　田島 田中小	○中川　五十部　久保田 瓦屋

研究部長は各班の取りまとめや調整等を行う。

４　価値の創出と受容，転移をコアにした教科融合カリキュラムに関する研究発表会について

○日時　１０月２２日（土）終日開催

○方法　参集→参集（人数限定）→オンライン（６月頃決定予定）

○日程　①研究概要説明

②公開授業①（各教科等）※オンラインの場合研究協議①

③公開授業②（創る科）※オンラインの場合研究協議②

④分科会

講師，カリキュラムアドバイザーを交えての分科会を開く。

⑤対談

上智大学　教授　奈須　正裕　先生

国立大学教育研究所総括研究官　福本　徹　先生

⑥運営指導委員会

※オンラインの場合は，授業は事前視聴とする。（Ｒ３年度の経験を基に）

※授業者は，次のとおり決定していく。

●各教科等の授業…国語部，算数部，音楽部，体育部，道徳部の各１名の計５名。

●「創る科」の授業…５名（希望調査により調整する。調査の〆切４月１１日（月））。

※講師は，各教科等については各教科部で挙げ研究部と相談の上，決定する。「創る科」については運営指導委員会の先生を中心にお願いをする（調整は研究部）。

５　幼小中一貫教育実践研究発表会について

詳細については今後の幼小中合同会議，並びに幼小中研究部会の中で決定していく。ただし，小学校として年度初めより計画的に研究を進めるため，次のことについては順次進めていく。

●授業者は国語部，社会科部，算数部，理科部，生活科部，図工部，家庭科部，体育部，外国語部，総合部の各１名の計１０名。

●指導助言者として公立の先生を招聘する。

６　共同研究と研究の連携

（１）カリキュラムアドバイザーとの共同研究について

・カリキュラムアドバイザーの旅費は「創る科」予算から支出する。

・カリキュラムアドバイザーの所属長には，会議参加に当たっては，「出張」扱いとしていただく。

・委嘱と派遣については，別紙参照する。

（２）学内との連携及び共同研究

①目的

学内教諭の専門的な知見から本校の実践に対する理論的な裏付けや示唆をいただくとともに，学内教諭に対して教育実践研究の具体的な事例を提供する。

③その他

ア　教育学部の教諭の名簿

まず教育学部にどのような方がいらっしゃるのかを知ることが第一歩である。何を専門に研究されているかは本学 HP にて検索することができる。

本学HP左下の「教諭紹介」のボタン
※URL：http://kyouin02.atm-y.jimu.yamaguchi-u.ac.jp/search/IST

イ　教育学部の教諭全員への本校研究計画の配布　：（未定）

附属教育実践センターを通じて，主な研究計画を教育学部教諭ＭＬを利用して配布し，周知する。（教諭ＭＬ担当の鷹岡先生へ依頼する）

＜主な研究計画＞

提案授業，幼小中一貫教育実践研究発表会の日時

ウ　各教科・領域の学内教諭との関係づくり

※幼小中合同会議により指導者数決定

・前期前半の提案授業について，論や授業づくりの相談をしたり，授業への参観をお誘いしたりする。

・各教科・領域部からも電話やメール等で重ねて直接お誘いするようにする。

研究説明会のお誘いをする際に，お知らせするとよい。

中野先生（国語科），田本先生（社会科），関口先生（算数科），佐伯先生・栗田先生（理科）
岡崎先生・中島先生（生活科），高橋先生（音楽科），静屋先生（図画工作科），
西先生（家庭科），斉藤先生（体育科），浦田先生（総合），田中先生（道徳）
猫田先生（外国語科）　　※令和３年度の先生方

（３）附属学校園との研究の連携

日々の保育参観，授業参観を行いたい。加えて以下のような形で連携をしていくこととする。

①毎月「幼小中合同会議」全教諭参加で行う。

②提案授業及び，協議会に幼稚園・中学校の先生方に参加を促す。

③幼稚園，中学校の研究授業，協議会へ可能であれば参加する。

また，山口学園のみならず，光小学校・中学校とも連携を図っていきたい。

（４）公立学校教諭への校内研究授業（提案授業）の公開

①目的

公立学校教諭の研修の場として，校内研究授業を公開するとともに，本校の研究のよさを広げる。

②期日・内容

提案授業計画による。

③案内・申し込み等

・ＨＰと県内メールにて案内をする。

・附属幼稚園・附属中学校にも研究部をとおして日程を連絡する。

・授業の２日前までに申し込みを受ける。

④その他

・参観者は，その後の協議や指導講話にも参加可能とする。

・上運動場を駐車場として開放する。

・研究部は，玄関前の案内黒板を準備する。

7　フリートークについて

本校の研究は，子供を学びの主体とし，子供たちがかかわり合いながら育つことをめざしている。

その授業づくりの基盤となるのが「フリートーク」である。全校で取り組むことで，本校のすべての教室，すべての子供たちの温かい関係を築き上げていきたい。これまで本校が取り組んできたフリートークの理念を大切にしながら，今の本校の子供たちに必要な力を付けることのできるフリートークをつくっていきたい。

（１）フリートークとは

フリートークとは，話題提供者の提案をめぐって，学級の全員で聴き合い話し合う活動である。

（２）フリートークでめざすこと

フリートークでは「分かり合い，支え合う温かい仲間関係」をつくることをめざして研修を重ねてきた。

「分かり合う仲間関係」…互いの思いに寄り添いながら，よさや違いを認め合う関係

「支え合う仲間関係」……互いのよさを生かしながら，支えたり支えられたりする関係

フリートークが話し合い活動であるため，「話す力」「聞く力」「話し合う力」を育てることを目的として行うものと思われがちである。しかし，あくまで第一義は，「分かり合い，支え合う温かい仲間関係」をつくることであり，「話す力」「聞く力」「話し合う力」は，「分かり合い，支え合う温かい仲間関係」をつくることの延長線上にある。

（３）フリートークの行い方

基本的な行い方は次のとおりである。

ア　一人の子供が話題を提供する

イ　みんなで話題について話し合う

ウ　話題提供者がまとめる

エ　教師が価値付けをする

（４）フリートークを充実するために

フリートークを充実していくためには，子供も教師も共に「どのようなフリートークをつくり出していきたいのか」というイメージを共有することがとても大切である。子供も，教師も，同学年で，異学年で，フリートークの姿を見合ったり，互いの取り組みのよさについて語り合ったりする機会を積極的に取り入れていくとよい。

（５）その他

Ｒ４年度は，フリートークを国語の時間としてカウントしないため，互恵的なかかわりを生み出すフリートークを追究する。

８　着任者に関わること

（１）着任者による授業参観について

①目的

着任した教諭が本校の授業について知る。

②方法

中川教諭による道徳科授業を参観し，放課後に協議を行う。今年度は，着任者と研究部が必ず参加する。全員参加ではない。参加が可能であれば積極的に参加をお願いしたい。

日時　４月１３日（水）５校時　放課後

場所　３年１組教室　会議室

（２）着任者による授業について

①目的

着任した教諭が本校の研究について知る。

②方法

（ア）　期間

５月中に行う。

（イ）　公開対象

チームによる公開，事後検討を行う。チームは以下のとおりである。

着任者	田島（社会）	田中（体育）	久保田（国語）
メンバー	○津守　志賀 五十部　林　校長	○原田　岡本 石田　教頭	○中川　重枝 後藤　今津　池永

※チーム以外の参観も積極的に行う。　○はチーム長

③授業構想，指導案検討

指導案検討は以下の担当と行う。

【社会】津守　　【体育】原田　【国語】中川

・指導案は A4 １枚で作成する。形式については，単元（題材）計画，本時案のみとする。

④その他

・主体的，協働的で問題解決的な学びをつくるための各教科・領域部の取組をできるだけ理解することが大切である。これまでの指導案集や研究集録を熟読したり，他の教諭の授業参観を積極的に行ったりする。

・チーム長は授業と事後検討の日時を２週間前までに決定し，研究部長に伝える。

・参観した者はチームでの事後検討に参加するとよい。

（３）着任者によるフリートーク参観

今年度着任した教諭が本校のフリートークについて知り，フリートーク研究を進めていくことができるようにする。そのために，年度初めに専科教諭が朝の会に入り，フリートークを行う。その間，今年度着任した教諭は他学級のフリートークの参観をすることができるようにする。日時については，後日提案する。

９　各種学習指導案について

各教科等学習指導案，学習指導計画，創る科学習指導案，本時案の様式について別紙様式のとおり提案する。

１０　各種提出期限，提出先，提出方法について

	提出期限	提出先	提出方法
個人研究テーマ	４月１８日（月）	yamasyo→01R4data→03研究部→☆提出物はこちら→0１　個人研究テーマ	・ワードで所定のフォルダに提出する。
提案授業（学習指導案）	授業の７日前	yamasyo→01R4data→03研究部→☆提出物はこちら→0５　提案授業　→学習指導案	・学習指導案，指導計画，教科書データを一式（DocuWorks）にまとめる。 ・職員室前面黒板にて提出したことを伝える。
提案授業（授業記録）	研究発表会当日（可能な限り）	yamasyo→01R4data→03研究部→☆提出物はこちら→0５　提案授業　→授業記録	・研究部が授業動画と写真を保存する。
着任者授業	授業の３日前	yamasyo→01R4data→03研究部→☆提出物はこちら→04 着任者授業研	・本時案を提出する。 ・全教職員（研究に関係する）に机上配付。
研究開発に係る研究発表会（学習指導案）	研究発表会に向けた計画の中で詳細を提案する。（目安は研究発表会の１カ月前）	yamasyo→01R4data→03研究部→☆提出物はこちら→0２　研究開発関係→学習指導案	・学習指導案を提出する（ワード）。
研究開発に係る研究発表会（授業記録）	研究発表会当日（可能な限り）	yamasyo→01R4data→03研究部→☆提出物はこちら→0２　研究開発関係→授業記録	・担当（視聴覚班）が授業動画と写真を保存する。
幼小中一貫教育実践研究発表会（学習指導案）	研究発表会に向けた計画の中で詳細を提案する。（目安は研究発表会の１カ月前）	yamasyo→01R4data→03研究部→☆提出物はこちら→03 幼小中一貫教育→学習指導案	・学習指導案，指導計画をそれぞれPDFにまとめる。
幼小中一貫教育実践研究発表会（授業記録）	研究発表会当日（可能な限り）	yamasyo→01R4data→03研究部→☆提出物はこちら→03 幼小中一貫教育→授業記録	・担当（視聴覚班）が授業動画と写真を保存する。
カリキュラムアドバイザー（派遣文書，委嘱	研究部より期日を伝える。 派遣…来校の１カ月前 委嘱…所属長同士の確認	yamasyo→01R4data→03研究部→☆提出物はこちら→06 カリキュラムアドバイザー　→派遣文書	・別紙参照する。

文書，礼状）	後 礼状…年度末	→委嘱文書 →礼状	
指導助言者【幼小中】（派遣文書，礼状）	研究部より期日を伝える。 派遣…来校の１カ月前 礼状…研究発表会後１週間内	yamasyo→01R4data→03研究部→☆提出物はこちら→07 指導助言者（幼小中） →派遣文書 →礼状	・別紙参照する。
講師【研究開発】（派遣文書，礼状）	研究部より期日を伝える。 派遣…来校の１カ月前 礼状…研究発表会後１週間内	yamasyo→01R4data→03研究部→☆提出物はこちら→07 講師（研究開発） →派遣文書 →礼状	・別紙参照する。

※各種様式については，一括して以下のフォルダにて管理する。各自必要な様式について，コピーして使用する。

yamasyo→01 R4data→03 研究部→01 各種様式

１１　教室掲示について

（１）前面掲示について（掲示物の例）※教室によっては左右反対になる場合がある

○基本的には，学級担任が自由に創意・工夫して行う。

○前面掲示については，基本的に目標に関するもののみとし，シンプルにする。

○前面向かって左側掲示

なし

○前面中央掲示（例）

・今月の歌（コロナの影響により中止している。）・めざす学級像・めざす授業像　等

○前面向かって右側掲示

なし

（２）背面掲示について

○「創る科」の学びの足跡を掲示する。内容としては，８の価値と子供の学びを蓄積していく。「創る科」の学びが各教科等の学習に転移することをねらいとしている。

・価値を記した掲示物と子供の学びを記していく掲示物については，研究部がデータを準備する。学年に合わせて各自が印刷して使用する。
・掲示場所については，各学級担任に一任する。
・価値を示す順序は，各学級担任の意図による。予め価値をすべて示す場合は，初めから価値を記した掲示物を示してもよい。

○基本的に子供たちの作品や研究教科等における学びの足跡を掲示し，年間を見通した動きのある掲示を心がける。

○以下の掲示物は，これまでの本校での掲示物の一例である。

（・給食，掃除当番表・バス時刻表・附属小のやくそく・給食だより・学校図書館のきまり・献立表・委員会だより・学級だより・その他）

１２　その他

（１）研究に係る申し合わせ

①研究会議について

・原則として全員参加とする。時間は基本的には９０分を原則とする。子供や保護者の対応がある場合は，そちらを優先する。その他の理由がある場合は教頭，研究部長に相談する。

・指導案のプリントアウトは，各教諭で行う。ただし，校長・教頭については直接届けること。プロジェクトチームの資料については，各プロジェクトチームより配付する。

※各教諭が多忙であることは十分承知の上だが，必ず提案資料に目を通した上で，自分の意見や自分なりの見方をもって研究会議に臨む。

・研究会議における発言は，意見なのか，感想なのか，質問なのかをはっきりさせる。また，発言するときは，遠回しに言わず，理由や問題点を端的に言うように心がける。そのために，発言前にメモ書きしておいたり，頭の中で構想したりしながら，しっかり整理をしておくようにする。みんなの限られた時間を大切にしたい。

②研究費について

研究費については，研修旅費と研修図書費に充てる。

・研究費は教育後援会より奨学寄付金として本学に寄付していただいたものを捻出している。大切に，かつ有効に使用したい。

・研修旅費については，他附属の研究発表大会，各教科・領域の学会や研究会への参加に使用することとしている。どちらも教師の力量を高めるためには必要な研修である。どちらか一方だけではなく，どちらにもバランスよく参加していただきたい。「創る科」に関わる研修に関しては，「創る科」予算から計上する。その際は出張前に確実に事務に確認すること。なお，研修出張の希望は校長，教頭，研究部長に申し出るようにする。

・研究費は１人８万円。書籍を購入したり，研修に行ったりして研究費を使用する際には必ず，事前に事務部に申請する。事前の申請がないと研究費が使用できない。

（２）各校の校内研修等への派遣依頼について

原則として派遣依頼に応じる。その際，本校の日程とよく照らし合わせて支障がないことを確かめる。個人的に依頼を受けた場合は，校長，教頭，研究部長に必ず連絡し，了解を得た上で，校長をとおして，正式に依頼を受けるようにする。なお，学校として依頼を受けた場合は，校長，教頭に相談の上，詳細を決定する。

（３）県教委との連携について

県教委と本学が計画中の，「教育委員会と山口大学教育学部附属学校の協働による教育力向上（授業力向上及び校内研修活性化）事業」の実施に協力することで，本校の研究の成果を，県内の公立校に広める。

◇おわりにー研究に向かう我々の構えー

■　研究は，「目の前の子供一人ひとりの育ち」を支えるために行う

本校の研究，つまり，提案・研大の指導案検討・授業公開・授業検討・日々の実践のすべては「目の前の子供一人ひとりの育ち」を支えるために行うものである。指導案が通ることがすごいとか，再提案はだめだから恥ずかしい…そんなつまらないプライドは必要ない。子供が学び，育つためにはどのようなことが必要であるかを自ら考え，子供のために最善を尽くそうとすることこそが大切にしたいプライドである。そして，子供の小さな歩みや些細な変化に気付き，喜び合える我々でありたい。研究の成果は，子供たちが姿で示してくれる。子供のために絶えず前進を続ける教師集団でありたい。

■　自らの「専門性」を高める

我々はそれぞれ自分の専門教科・領域をもつ。一人ひとりが附属小の看板を背負っているのである。まずは自分の中で，教科・領域の価値や意義，育てたい見方や考え方，学びの特性，指導・支援の在り方，そして，めざすべき子供の姿を明確にしていきたい。そのために，自分で時間をつくり，先行研究を探り，書籍を読み，授業実践を積み重ね，自己研鑽に努めるようにする。我々一人ひとりの専門性の高まりは，本校の研究を引き上げていくことにつながる。

■　自らをひらき仲間を支える「同僚性」を大切する

独りよがりな研究では，子供の一人ひとりの育ちを支えることはできない。また，一人の教師の小さな力でも為し得ない。だからこそ，我々は「同僚性」を大切にする。自分をひらき，学級をひらき，フリートークや授業を見合う。具体的な子供の学びの事実をもとに，互いの「見え方」を惜しみなく交流・共有していく。そうしていく中で，一人では見えなかった「子供の学びの背景」や「育ちの可能性」，「育ちを支える手立て」等が見えてくる。いつも決まったメンバーで交流するのではなく，様々な可能性を探るために様々な考え方の仲間と交流することこそ自らを育てる糧となる。

■　「誠実さ」「謙虚さ」と「思いやり」を大切にする

同僚性は，「誠実さ」「謙虚さ」「思いやり」によって支えられる。誠実に真心をもって教育研究にあたる教師は，同僚にも子供にも受け入れられる。謙虚さをもつ教師は，同僚からも子供からも学ぶことができる。思いやりがある教師は，子供にも同僚にも心を砕き，その成長や変容を喜び合うことができる。互いを尊重し信頼し合う関係の中でこそ，研究は深まると確信している。

■　研究会議は，自分の最善を尽くして，互いをみがき合う場にする

研究会議では同僚性を存分に発揮したい。尊重し信頼し合う関係の中で，互いをみがき合おうとする議論は，子供や我々自身の成長や変容につながる。「まだ〇年目だから」「的外れになるのでは」など考えずに，提案や指導案を誠実に読み，思考し，発言しよう。指導案の読み方や発言の仕方さえも学びの一つである。仲間の発言を謙虚に受けとめながら，それぞれが最善を尽くしてこそ，真のみがき合いが生まれる。そして，それらを振り返るとき，我々は仲間の思いやりを実感することになるだろう。

■　「限られた時間」を有効に使う

限られた時間を有効に使うには，仕事の優先順位づけ，軽重づけ，精選や効率化を行うことが必要である。複数の仕事を並行して行う習慣もつけたい。そうすることで，ゆとりが生まれ，子供と向き合う時間や本を読む時間，教材研究する時間を生み出せる。また，互いの限られた時間を大切にするためにも期限を必ず守るようにしたい。

別紙１　提案授業の検討について

月	日	曜	授業者	チーム	授業検討時の役割分担	
					司会者	指定討論者
6	2	木				
6	8	水				
6	16	木				
6	23	木				
6	30	木				
7	6	水				

※決定次第、再配付します。